拾遺集恋部における贈答歌とその詞書

中　周子

一　はじめに

従来、拾遺集恋部の配列構成を論じる際には、歌および歌題を主として分析考察が行われてきた。贈答歌であることや、その詞書が取り上げられ問題になることはほとんどなかった。次章で概観するように、恋部の配列構成に関する研究においては、必ずといってよいほど、恋の時間的な推移や、恋の段階が問題になるのであるが、考えてみれば、恋の段階を考える時、歌の内容よりも詞書の記述が明確な根拠となることが多い。しかも、どのような詞書を付すかによって、同じ歌でも異なる恋の段階の歌となり得るし、また、詠者の性別さえも変わり得る。恋歌における詞書は、単なる詠作事情の説明に留まらず、その歌を如何に読ませたいかという編纂者の意図を反映するものであるといえよう。

後撰集と拾遺集に重出する歌の詞書を比較して見ると、このことがよく看取できる。例えば後撰集に次のような詞書を付す歌がある。①

忍びて御匣殿の別当にあひかたらふと聞きて父の左大臣の制し侍りければ　　敦忠朝臣

いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君にかたらん

（恋五、９６２）

この逢後の恋の歌が、拾遺集では逢う以前の求愛の歌に変わっている。②

（侍従に侍ける時、女にはじめてつかはしける）　　権中納言敦忠

いかでかはかく思てふ事をだに人づてならで君にしらせむ

（恋一、６３５）

歌にも異同はあるが、詞書の改変によって恋の段階が変更を加えら

れているのである。また、作者の立場が異なってしまう例がある。次の後撰集歌は女の立場の歌で詠まれた歌である。

（題知らず）　小野小町が姉

ひとりぬる時は待たるる鳥の音もまれに逢ふ夜はわびしかりけり　（恋五、８９６）

この女性の立場で読まれた歌が拾遺集では次のようになる。

（はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける）　よみ人知らず

ひとりねし時は待たれし鳥の音もまれに逢ふ夜はわびしかりけり　（恋二、７１８）

「よみ人知らず」ではあるが、明らかに男性が初めての逢瀬を詠んだ歌に変わっているのである。いずれも後撰集の歌が詞書を改変されることにより、異なった解釈を付与されて拾遺集中に置かれているのである。[3] 拾遺集の詞書には編纂者の意図が強く表れていることを端的に示す例といえよう。

このように見てくると、恋部の構成を考える上で、実際に贈答された歌とその詞書もまた考察する必要があると考えられる。ここで、従来の構成論を見ておきたい。

二　拾遺集の配列構成

拾遺集の配列構成については様々な角度から研究されてきた。早く、拾遺抄との比較にはじまり、構成・撰歌の点において拾遺抄の方針をいかに継承し、あるいは独自な方法を打ち出しているかという問題が論じられてきた。とくに、片桐洋一氏が「拾遺集の組織と成立[4]」において提示された、拾遺集の和歌は、時間的推移と歌ことば及び作者によって配列され、さらに、歌材、歌語、歌が詠まれた時等によるまとめという三つの編纂方法を按配したものであるという結論は通説となっている。

本稿で取り上げる恋部の構成配列に関しては小町谷照彦氏の興味深い指摘がある。[5] 拾遺集の配列が「物語的連続性」を持っているとの指摘である。すなわち、恋三は「山風を素材として孤閨の憂愁を詠じた歌」にはじまり、「待人の来ぬ夜が重なったことを嘆く歌」で終わるが、恋三の和歌配列は、「山→月→夜→夢→四季→独寝」という連続した流れを示しており、これは一つの解釈に過ぎないかも知れないが、歌の内容が訪れて来ぬ人を待ち焦がれているものであることを思うと、来ぬ人を待ち『山』を眺めていると、山から『月』が昇り、『夜』が更け、床について『夢』をみ、夢の中に『四季』の恋を味わい、夢からさめて『独寝』の夜々を述懐するという、

まさに歌でもって構成された一篇の物語が描き出されるのである」と述べておられる。また、「他の巻についてもこのような流れをすべて顕著に認め得るとするのは過言かもしれないが」との条件付で、「主題が各歌相互の表現や内容の関連によって連続した流れとなって一つのまとまりをなしているのである」と結論され、恋部全体については、恋一は「恋を忍ばせている頃から恋の成就まで」を、恋二は「恋の成就後の苦しみ」を、恋三は「独り寝の夜々」を、恋四は「旅に出ての思慕」を、恋五は「燃えるような烈しい慕情」を描くとされる。

さらに、小町谷氏は「拾遺集恋歌の表現構造」[6]において、「恋歌の核となる語句に視点を置いて、様々の位相の恋をどのような語句が担っているのか」を究明された結果、恋五巻はそれぞれが次のように、恋の段階をおう構成になっていると結論される。

恋一　まだ逢う以前の段階の恋
恋二　逢ったばかりの段階の恋
恋三　やや飽きがきた段階の恋
恋四　いよいよ忘れられかけた段階の恋
恋五　もはや絶望的な段階の恋

また、小池博明氏は『拾遺集の構成』[7]で、文章構成理論を応用し、各巻は複数の恋を描く数歌群が並列するという構成をとると分析される。すなわち、「無縁、忍恋、求愛、逢瀬、疎遠、別離、絶縁」の各段階の歌からなる「追歩型歌群」が、どの巻にも並列していることを指摘される。そして、恋一と恋二、恋三、恋四、恋五は、起承転結の関係になっているとして、次のような構成を提示される。

恋一　逢瀬に至らない恋の発端
恋二　逢瀬に到るが破綻した恋の発端
恋三　独寝から逢瀬断念
恋四　断念した恋への執着が蘇る
恋五　実現せず実らなかった恋の回想

両氏の論は、拾遺集恋部は恋の進展、段階を歌によって描いているという点では一致している。このように、現時点では、部分的には拾遺集に特徴的な構成配列の方法を認めつつも、大枠では古今集と類似の方法によって配列構成されている、すなわち、「不逢恋」から「逢恋」、「逢不逢恋」を経て恋の終末期の諸相を段階的に描くとみなされているのである。

それでは、詞書はこのような恋部の構成にどのように関わっているのであろうか。また詞書に注目した場合、どのような構成が見えてくるであろうか。

三　詞書からみた恋部の構成

拾遺集恋歌に付けられた詞書は簡略でしかも数も少ない。この点については、小町谷氏が晴の歌を多く収めるという拾遺集の性格によるもので、「はれの歌が多いということは、私的な詠作の場面に対する関心が少ないことになり、後撰集などと比較して詞書が簡略である。これは恋歌に典型的に表われ、題知らずの歌がかなり多[8]」いといわれている。確かに詞書を付す恋歌の数は多くはないものの、それらの詞書を辿ってみると、歌によるよりも更に明確に配列構成の方法が見えてくる。

まず、恋一の詞書には次のような例がある[9]。

「女のもとにはじめてつかはしける」（６２４番詞書）

「まさただがむすめにいひはじめ侍ける、侍従に侍ける時」（６３３番詞書）

「侍従に侍ける時、女にはじめてつかはしける」（６３４番詞書）

この巻の詞書には女性に恋文を出したことを記したものが多いのであるが、「はじめて」という恋の段階を明確に示す語が用いられている。思いを掛ける相手に「はじめて」贈った恋文であるという詞書は他の巻の歌には付されない。以後の巻には「女のもとにつかはしける」（恋二、７０７番詞書）、「月あかかりける夜、女の許につかはしける」（恋三、７８７番詞書）、「女のもとにつかはしける」（恋四、８７８番詞書）、「女につかはしける」（恋五、９４１番歌）と書かれるようになる。

詞書においてこのような区別があることは、次にあげたごとく恋の初期段階のものとみなせる歌が、恋部の後半部にも見出せることとは対照的である。

（題しらず）　人麿

ますかがみ手に取り持ちて朝な朝な見れども君にあく時ぞなき[10]

（恋四、８５７）

（題しらず）　人麿

なには人あし火たくやはすすたれどをのがつまこそとこめづらなれ

（恋四、８８７）

（題しらず）　（人麿）

かきくもり雨ふる河のささらなみ間なくも人の恋ひらるる哉

（恋五、９５６）

（題しらず）　（坂上郎女）

しかのあまの釣りにともせるいさり火のほのかに人を見るよしも哉

（恋五、９６８）

ちなみに、古今集には「はじめて」贈ったと記す詞書は見られな

い。一方、後撰集には、「女のもとにはじめてつかはしける」（恋二、602番詞書）、「はじめて女のもとにつかはしける」（恋四、867番詞書）等の類似の例が八例あり、恋二、四、六に配されている。後撰集恋部においては、冒頭歌の詞書が「からうじてあひしりてはべりける人に、つつむことありて逢ひがたく侍りければ」とあるように、逢て後の段階の歌からはじまっている。また、恋部の後半に置かれた詞書においても、「せうそこはかよはしけれど、まだ逢はざりける男を、これかれ逢ひにけりといひさはぐを」（恋五、904番詞書）という不逢恋の歌であることを示す詞書を付した歌が置かれている。後撰集は、古今集の恋の段階をおって配列するという方法を踏襲してはいない[11]ことが明らかである。従って、後撰集においては「はじめて」の恋文であることを記した詞書は単に歌の説明であり、構成上の効果や恋の段階を示すという役割を意識して記されたものではないといえる。

このように古今集や後撰集と比べてみると、拾遺集の詞書が巻々の構成を意識して意図的に付されていることがうかがえる。恋一が未だ逢わぬ段階の恋歌によって構成されていることは、すでに認められるところであるが、さらにこれらの詞書からは求愛の心情を描くことに主眼が置かれていることがわかる。

恋二の前半の詞書には、「はじめて」逢瀬がかなった事が記されている。

「はじめて女の許にまかりてあしたにつかはしける」（714番詞書）

「本院の五の君の許に、はじめてまかりてあしたに」（720番詞書）

「女の許にまかりそめて」（723番詞書）

ところが、恋二の後半にかけての詞書には、最初の逢瀬からの時間的な隔たりが「ひさしく」なったことが示される。

「女に物いひはじめて、さはる事侍てえまからでいひつかはし侍ける」（728番詞書）

「忠房がむすめのもとにひさしくまからでつかはしける」（740番詞書）

「ふるく物いひ侍ける人に」（760番詞書）

すでに逢瀬は間遠になったことを示す詞書が見出せる。恋二は逢瀬後の段階の恋歌で構成され、熱愛と間遠になっても変わらぬ恋情が描かれている。

恋三の詞書には、さらにいっそう来ぬ人を待つ年頃が積もってゆくという時間の経過が記されている。

「ひろはたのみやす所ひさしう内にも参らざりける（後略）」（810番詞書）

「天暦御時、ひろはたのみやす所久しく参らざりければ御ふみつかはしけるに」（８３０番詞書）

「たえて年ごろになりにける女の許にまかりて雪のふり侍ければ」（８４７番詞書）

と、逢瀬のない状態が長く続いていることが記される。広幡御息所は村上天皇の寵愛が篤かったことが十訓抄等にも伝えられている。帝寵の女性さえ「久しく」逢瀬が途絶えることを物語る詞書である。また、「春までおとせぬ人」（８１７番詞書）、「なでしこおひたる家」（８３１番詞書）、「萩につけてつかはしける」（８３８番詞書）、「雪のふり侍ければ」（８４７番詞書）等からわかるように、恋部の中でこの巻のみは春夏秋冬の景物によせた恋歌がそろっている。途絶えた逢瀬を待つ時間の長さを、めぐる季節によせて強調したものといえよう。

恋四には、次にあげるように、結婚と離縁を示す詞書を付した歌が対のごとくに置かれていることが注目される。

「元輔がむこになりてあしたに」（８５０番詞書）

「くにもちがむすめをともみつまかり去りて後、鏡を返しつかはすとて、かきつけてつかはしける」（９１５番詞書）

恋四は、前述のごとく「旅に出ての思慕」「いよいよ忘れられかけた段階の恋」「断念した恋への執着が蘇る」段階の歌で構成されているといわれてきた。しかし、他の巻に見られない「むこになりて」と「まかり去りて」という結婚と離縁を具体的に示す一対の詞書に注目するならば、恋のひとつの段階の歌をまとめた巻というよりも、恋の経過全体を見渡す巻として構成されているのではないかと予測される。さらに、この巻には次のように比較的詳しい事情を記した詞書が少なくない。

①「一条摂政、内にてはびんなし里にいでよといひ侍ければ、人もなき所にて待ち侍けるにまうでこざりければ」（８５２番詞書）

②「女をうらみてさらにまうでこじとちかひて後につかはしける」（８７１番詞書）

③「天暦御時、承香殿の前をわたらせ給て、こと御方にわたらせ給ければ」（８７９番詞書）

④「年を経てさねあきらの朝臣まうできたりければ、すだれごしにすへて物がたりし侍けるに、いかがありけん」（８９８番詞書）

⑤「入道摂政まかりたりけるに門ををそくあけければ、たちわづらひぬといひいれて侍ければ」（９１２番詞書）

①は、来ぬ男の言い訳を信じて言われるままに従った結果、相手の愛情の浅い事を知ったという経過を、②は、女を恨み別れを言い

渡した後に、自らの心の変化に気付いたという後悔を、③は他人行儀となってしまった夫婦仲が再び元にもどる可能性を、④は愛情の変化を前渡りによって知らされることになるという状況を、⑤はもはや歓迎されなくなった通い婚の有り様を、それぞれ描く詞書である。これらの詞書の描く事情はさまざまであるが、共通しているのは、「心がわり」という主題である。恋四は、恋の成就から終局までの過程で、熱愛から冷却を経て再燃する恋心を描き、恋人と自らのあわいで行きつ戻りつする「心」のたゆたいの様相を描く巻であると考えられよう。

恋五の詞書には次の例がある。

「善祐法師流され侍ける時、母のいひつかはしける」[12]（９２５番詞書）

「ものいひ侍りける女の後につれなく侍て、さらに逢はず侍ければ」（９５０番詞書）

「女のもとにまかりけるをもとのめの制し侍ければ」（９６３番詞書）

「延喜御時承香殿女御の方なりける女に元良のみこまかりかよひ侍ける、絶えて後いひつかはしける」（９７７番詞書）

「左大臣女御失せ侍にければ、父おとどのもとにつかはしける」（９９１番詞書）

「遠き所に侍ける人、京に侍ける男を道のままに恋ひまかりて、高砂といふ所にてよみ侍ける」（９９８番詞書）

これらの詞書には、種々の事情で再び逢うことがかなわぬ、絶望的な恋の終わりが示されている。ことに、「流罪」や「死別」「遠国への下向」という決定的な別離から、本妻の妨害や相手の心変わりによる日常的な別離までさまざまな恋の終末が描かれる。恋五は恋の終焉にあって、絶望する心情が描かれているといえよう。

このように見てくると、拾遺集恋部を構成する上において、詞書は恋の段階を示す指標としての役割を担わされていると考えられるのである。ただし、それらの詞書は、ほとんどが現実の恋を描くもの、すなわち、贈答歌またはその一方に付されたものであった。そこで、次に、実際の恋の場においてやりとりされた贈答歌が、恋部にどのように組み込まれているかについて見ておきたい。

四　恋一における贈答歌

贈答歌は古今集には一四組であったのが、後撰集になって一八〇組に増大した。そして拾遺集では二〇組に減少する。贈答歌の数だけを見れば、拾遺集は古今集に近い。贈答歌を多く収録することで現実の恋を描くことに徹した後撰集に比して、古今集と拾遺集は、歌そのものによって恋の情趣を描くことに重きを置いているといわ

れる所以である。

しかし、前述したように、拾遺集恋部の贈答歌に付せられた詞書の中には、恋の段階を示すという構成上に重要な役割を果たすと考えられるものがあった。とするならば、現実の恋であることを示す詞書を伴う贈答歌も、配列構成上に何らかの役割を与えられているのではないだろうか。

拾遺集恋部には贈答歌は九組しかない[13]。古今集恋部も九組で（ただし左注によって、さらに一組が贈答歌となるのを加えると一〇組になる）ほぼ同数である。これらの贈答歌の配置を見ると、古今集では恋一に一組、恋二に一組、恋三に三組、恋四に三組、恋五に二組である。とくに集中する巻はない。一方、拾遺集では、九組のうち六組までが恋一に置かれている。残りの三組が、恋二と三と五に一組ずつ配置されている。数量的には古今集と同じ傾向を示す拾遺集ではあるが、贈答歌の配置を見ると、現実の恋歌を効果的に組み入れようとした編集意図がうかがえる。

また、贈答歌のいずれか一方だけのものを見ると古今集には一五首であったのが、拾遺集では五五首に増加している。実際にやりとりされた男女の恋歌を収載しようという傾向は、古今集よりも拾遺集において強く表れているといえよう。

では、贈答歌が集中している恋一において、贈答歌はいかに組み込まれ、どのような役割を果たしているのかを見てゆきたい。

恋一は有名な天徳内裏歌合の名勝負の歌によって始められる。一首目の忠見詠「こひすてふ我が名はまだき立ちにけり人しれずこそ思そめしか」（６２１番歌）に歌われる人知れずはじまった恋が、二首目の兼盛詠「しのぶれど色に出でにけり我が恋はものや思と人のとふまで」（６２２番歌）では早くも他人に気付かれてしまったことを嘆く。しかし、三首目の貫之の歌「色ならばうつる許もそめてまし思心をしる人のなさ」（６２３番歌）では、肝心の恋の相手に知ってもらえぬ嘆きが歌われる。

そして、四首目（６２４番歌）には最初の恋文が置かれる。「女のもとにはじめてつかはしける」平公誠の歌によって「忍ぶ恋」から「色にいづる恋」へと展開する。しかし、返事は記されない。返事はなかったと読まそうとするかのようである。

この後には、題知らず歌群―「なげきあまりつゐに色にぞいでぬべきいはぬを人のしらばこそあらめ」（６２５番歌）から「よそにのみ見てやは恋ひむ紅のすゑつむ花の色にいでずは」（６３２番歌）に終わる―が続く。自からの気持ちをはじめて相手に伝えた公誠詠を受けて、「色に出づる恋」のテーマを繰り返し、次の贈答歌群へと繋ぐ役割を担っていると考えられる。

よみ人知らず歌群は主題を展開させる歌または各主題の中心とな

る歌の前後に効果的に配され、あたかも舞台上で展開する恋物語の背景に流れるコーラスの様相を呈している。

続いて男性達の初めての求愛歌群（６３３～６３５番歌）がおかれる。いずれも返歌はなくすべて贈歌のみである。そのあとに恋部で最初の一組の贈答歌が置かれる。

つつみの中納言のみやす所を見てつかはしける　小野宮太政大臣

あなこひしはつかに人をみつのあはのきえかへるともしらせてしがな

返し

ながからじと思心は水のあはによそふる人のたのまれぬ哉

何とか自らの恋心を相手に知らせたいと願った男性の歌に対する女性の返歌は、いわゆる「女歌」の常套的な表現を用いた「頼まれぬ」という否定的なものである。[14]

この後には五首の題知らず歌群（６３８～６４２番歌）が続くが、「くるしき物とこひをしりぬる」（６３８番歌）、「見なれぬ人もこひしかりけり」（６３９番歌）、「心をよせてこふるこのごろ」（６４０番歌）、「つれなき人に」（６４１番歌）、「人はつれなし」（６４２番歌）と、自らの苦しさと相手のつれなさを対比させる内容で、前置された一組の贈答歌に表現された男女の心情を反復し、つれない返歌を受け取った男の心情に共鳴する内容になっている。忍ぶ思いを色に出だし、ようやく返事はもらえたものの、相手のつれない返歌のためにますます恋の苦しさは募る。そのような心情の流れが歌によって描かれているといえよう。

残りの五組の贈答歌も、それぞれに前後の歌と歌語の連続性を持ちつつ、主題の展開に関わっているのであるが、ここでは、それらをまとめて列挙しておくことにする。

①６５３・６５４番歌

男のよみてをこせて侍ける

あはれともおもはじ物を白雪のしたに消えつつ猶もふるかな

返し　中務

ほどもなく消えぬる雪はかひもなし身をつみてこそあはれと思はめ

②６５７・６５６番歌

大原野祭の日さかきにさして女の許につかはす　一条摂政

おほはらの神も知るらむ我が恋はけふ氏人の心やらなむ

返し　よみ人知らず

さか木ばの春さす枝のあまたあればとがむる神もあらじとぞおもふ

③６７０・６７１番歌

けさうし侍ける女のさらに返ごとし侍らざりければ　藤原実方朝臣

わがためはたなゐのし水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと

返し　よみ人知らず

かきやらばにごりこそせめ浅き瀬のみくづは誰かすませても見む

④674・675番歌

女のもとにつかはしける　よみ人知らず

ひとしれぬ涙に袖は朽にけり逢ふ夜もあらばなににつつまむ

返し

君はただ袖許をやくたすらむ逢には身をもかふとこそ聞け

⑤689・690番歌

ちぎりけることありける女につかはしける　菅原輔昭

つゆ許たのめしほどのすぎゆけば消えぬ許の心地こそすれ

返し　よみ人知らず

つゆ許たのむることもなき物をあやしやなにに思をきけん

これらの贈答歌における男性の贈歌はすべて熱心な求愛という点で共通している。①はわが身を白雪に喩え「消えつつ」恋嘆く日々を訴える歌、②は祭の日に神かけての求愛、③は愛情がない女性にも「猶かきやらむ」と一途に求愛し、④は恋の嘆きのために流す「涙に袖」が朽ちると訴え、⑤はようやく取り付けた逢瀬の約束を違えられ「消えぬばかり」嘆いている。それぞれ異なる状況ではあるが、熱心で一途な求愛の歌である。一方、女性の返歌、反応は一様ではない。①「甲斐もなし」、また⑤「あやしや何に思をきけむ」と相手の嘆きを一蹴しつつ、①「身をつみてこそ」、④「身をもかふ」ことを求め、あるいは、③「誰かすませてもみむ」と拒絶し、あるいはまた、②「とがむる神もあらじ」と求愛を受け入れる歌もある。拒絶一辺倒ではないために、ますます恋心を募らせるという流れを作り上げる効果を果たしている。

このように恋一に贈答歌が集中して配置されているのは、恋文が恋の成就のための重要な手段であったという現実の反映に過ぎないとの見方もできよう。しかし、わずか九組という贈答歌の少なさは、何らかの意図により厳選された結果と見てよいのではなかろうか。しかも、そのうち六組を一つの巻に集中させている。恋の初期段階に贈答歌を多く配し、男性からの熱心な求愛を具体的な現実感をもって描こうという意図によるものと考えられる。

これらの贈答歌は、恋文のやり取りが始まってもなかなか逢うことを許されないもどかしさを強調し、また、恋文のやりとりによって一層深まる恋の嘆きと「逢瀬を待つ」心情が募って行く段階を描

くために効果的に配されている。贈答歌は恋一を構成する上に重要な役割を担って配列されているといえよう。

さらに、贈答歌の一方として収載された歌の考察が必要であるが、以上見てきたことからだけでも、贈答歌とその詞書が、恋の配列構成を考える上で等閑視できないことは明らかであろう。

五　おわりに

拾遺集恋部の構成を考える上で、実際に贈答された歌とその詞書にも注目すべきであることを考察してきた。拾遺集は、後撰集との差異の大きさのために、常に古今集との類似性が強調されがちである。恋部における贈答歌とその詞書についても、数量的に見れば古今集と変わらない。しかし、子細に検討すれば、数量的には少ないとはいえ、実際の恋の単なる反映にとどまらないことがわかる。例えば、贈答の大半は女の返歌が記されないことや、また恋の相手は「女」としか記されないこと等は現実味を捨象しようとしたかのようである。

考察の結果、その詞書によって現実の恋から生まれた歌として集中に配列された贈答歌は、恋の段階的な推移を示す指標となっていることがわかった。恋部の構成は、数少ない詞書によって端的に示されているのである。

詞書に注目することで、恋の進展・段階をおうという方法のみならず、例えば、恋四では「心がわり」を主題に、結婚から別離にいたる過程におけるさまざまな「心のたゆたい」を描くべく歌が配列されているという構成が見えてくるのである。

また、贈答歌は恋一において恋の情趣と心情に現実味を与える効果をあげている。後撰集において激増した恋の贈答歌、詳細になった詞書の面白さを、拾遺集編者は巧みに取り入れているといえよう。

拾遺集は、恋の進展を和歌によって描くという、また、晴の歌を中心にして現実の恋よりも恋の情趣を描くことを中心にすえるという、大枠では古今集の配列構成原理を踏襲しつつも、一方で贈答歌を中心とする実詠歌とその詞書によって有名無名の人々の恋物語を浮かびあがらせ、古から今に到る様々な恋模様を描きだそうとしたのである。

注

① 後撰集の本文は『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学、昭和四〇年刊）所収の天福本による。ただし、濁点を施し、仮名漢字等の表記は一部変えた所がある。前歌と同じ詞書、作者名には（　）を付した。

② 拾遺集の本文は『拾遺和歌集の研究・校本篇・伝本研究篇』（片桐洋一著、大学堂書店、昭和五五年刊）による。異本本文についての注記も同書による。表記と（　）については①に同じ。

③　片桐洋一「『拾遺集』における『後撰集』歌」（「国文学」第六九号、平成一年一二月号、後に笠間書院、平成一二年刊『古今和歌集以後』に所収）にすでに指摘されている。敦忠歌については「褻の歌から晴の歌へ」改めた例、小町が姉の歌は「新解釈による新本文」の例としてあげられている。また、佐藤和喜「拾遺集の物語性―後撰集との重出歌を中心に」（宇都宮大学教育学部紀要　第四七号、平成九年三月号）では、いずれも神婚観念を無化する例としてあげられている。

④　片桐洋一「『拾遺集』の組織と成立―『拾遺抄』から『拾遺集』へ―」（「和歌文学研究」二二号、昭和四三年一月）。後に『古今和歌集以後』に所収。

⑤　小町谷照彦「拾遺集の本質―三代集の終結点―」（国語と国文学、昭和四二年一〇月号）

⑥　小町谷照彦「拾遺集恋歌の表現構造」（「国語と国文学」、昭和四五年五月号）

⑦　小池博明著『拾遺集の構成』（新典社、平成八年刊）

⑧　⑤に同じ。題知らずは拾遺集恋歌の七四・四％を占め、後撰集恋部の一四・四％に比べて極めて多いが、古今集恋部の八八・九％に近いことが指摘されている。

⑨　異本第一系統は、この例のうち、６２４番詞書が「女のもとにつかはしける」、６４６番詞書が「まさただがむすめのもとにいひつかはしける侍従に侍ける時」とある。使用例は皆無ではないが、「はじめて」の用例数は異なる。

⑩　異本第一系統のみ、下句「見れども君があふときもなき」

⑪　片桐洋一「女流文学としての後撰集」（『論叢王朝文学』笠間書院、昭和五三年刊。後に『古今和歌集以後』に所収。）において指摘されている。後撰集の配列について「古今集的な配列のとらえかたでは説明が不可能」とし、その独自な組織の特色を論じている。

⑫　異本第一系統の本文には「善祐法師ながされ侍ける時ある女の家につかはしける」とあり、異本第二系統の本文には「善祐ながされはべりける時あるおんなのつかはしける」とあって、それぞれ作者が異なっている。

⑬　異本系統では八組である。異本第一系統、第二系統ともに返歌をそれぞれ一首欠いている。即ち、異本第一系統では巻五の円融院と少将更衣の贈答歌の返歌が、異本第二系統では、例に引いた恋二の６３６番の返歌がない。

⑭　鈴木日出男「女歌の本性」、『古代和歌史論』（東大出版会、平成二年刊）の定義による。